

私事で恐縮ですが、私の妻はフィリピン人で、結婚して10年ほどになります。彼女は5人兄弟姉妹の末子で、兄はアメリカ、姉はカナダにそれぞれ移住しています。マニラに残る兄、姉そして両親も含め、毎週末にはインターネット・ビデオで「家族会議」を開き、こまめに近況報告などをしています。このような状況は私の家庭の特殊事情ではなく、人口の約1割である

900万人が出稼ぎや移民として海外に在住するフィリピン人は、多かれ少なかれ経験していることでしょう。

このグローバルな家族会議が、昨年末頃より一層熱を帯びるようになりました。両親が結婚50周年を迎えるため、子供たちがマニラでの金婚式を計画し始めたのでした。式を挙げる教会やレセプション会場の予約、招待状の作成、参加者の衣装の注文など、検討事項は多岐にわたりました。インターネット会議はしばしば深夜に及び、意見の対立から時に海を跨ぐ兄弟姉妹喧嘩となることもしばしば。何とか金婚式当日を迎えた今年5月、一時帰国した兄弟姉妹も久しぶりに再会。会場には、両親の親族・友人、そしてゴッド・チャイルド(カトリックの洗礼や結婚式の際に結ばれる儀礼的親子関係にある人々)など計160人ほどが集まり、大盛況の賑わいとなりました。

兄弟姉妹同士、多大の労力と費用を費やしての金婚式でしたが、妻によれば「これは私達兄弟姉妹から父母へのせめてものお返し」とのことでした。フィリピン語には、「ウタン・ナ・ロオブ(内なる負債)」という言葉があり、様々な人間関係に対して用いられます。つまり、どのような人間関係にも何らかの「借り」と「貸し」があると考えられているのでしょう。なかでも、自分を生んでくれた父母への「借り」は一生かかっても返済しきれないとされます。今回の金婚式では、母国を遠く離れ、家族が世界各地に散らばった後も、強い絆で結ばれるフィリピン人家族の一面を垣間見た思いでした。

文: 広島大学 関 恒樹 准教授
イラスト: 県立広島大学 ロナルド・スチュワート准教授
2012(平成24)年 広報あきたかた 9月号掲載

